

特集

奥会津只見戊辰二五〇周年記念事業実行委員会が伝える

「戊辰150年」只見と戊辰戦争

「只見と戊辰戦争」①

避難民の受入れ

慶応4年(1868)1月、

京都の鳥羽伏見の戦いで始まった戊辰戦争。この奥会津地方一帯においても激しい戦闘が繰り広げられました。この戦争は、薩摩と長州を中心とする反幕府側の西軍と徳川幕府側の東軍との戦いでした。戦場は次第に関東、越後、東北と北上していき、5月には長岡戦争、8月に入ると会津戦争に突入します。5月19日、長岡城が落城すると、長岡藩主一行総勢約380人が会津に亡命するため八十里越を越えて、5月21日に只見へ到着しました。八十里越は会津と越後を結ぶ長大な峠で、丸1日以上かかる険阻な山越えの道です。藩主の牧野忠訓は只見字原の名主宅に、姫君さまは原の新国慎三郎宅に、老公の牧野忠恭は只見字沖の名主宅に宿泊しました。原の名主宅の分

戊辰150周年

只見町の戊辰戦争を伝える――

今年150周年を迎えた戊辰戦争―。

戊辰戦争当時、只見では越後長岡藩からの多数の避難者を受け入れた歴史があります。八十里越を越えてきた避難者はその数1万5千人とも2万5千人とも言われています。その中で最も語り継がれている人物が長岡藩家老「河井継之助」です。

只見町では、昨年から戊辰戦争150年に向けて「奥会津只見戊辰一五〇周年記念事業実行委員会」を設立し、只見町における戊辰戦争の象徴的人物「河井継之助」を中心に町の歴史文化を発信しています。

本号では、只見町における戊辰戦争の歴史と「奥会津只見戊辰一五〇周年記念事業実行委員会」についてご紹介いたします。

家には、今でも姫君が使用した布団が保存されています。藩主一行は只見に5日間滞在したのち若松へと出発しました。

7月29日、長岡城が再落城すると、東軍の引き揚げ兵や長岡藩士の家族が八十里越を越えて只見に入ってきました。その数は8月2日から10日までの間で2万5千人ほどにも達し、只見の地は避難者であふれ返り、混乱を極めました。折から八十里越は長雨が続き、泥だらけの道はよくすべりました。この峠を越えれば、どうしても数日間は見見に滞在せざるを得ません。当時の只見地方は田子倉村から塩沢村まで8か村、総戸数292戸の寒村でしたが、ここへ大挙して避難してきた人々であふれたのです。30戸の櫛戸村には508名が10日間ほど宿泊した記録が残っています。



▲矢沢家の一部を移築した河井継之助記念館にある継之助の終焉の間



▲河井継之助記念館では戊辰150周年特別展として丹羽族を紹介したコーナーや会津藩・白虎隊士の展示コーナーなどが設けられています

―只見と戊辰戦争②― 丹羽族の自刃―

避難民が只見に来たことにより、緊急に必要なものは食糧でした。兵士などから送り返されていましたが、当時は秋の収穫前で、

さらには長雨の影響により只見川で洪水が起き、若松からの救援米が滞ったため、避難民の食糧は圧倒的に不足していました。このとき、会津と越後境の八十里越と六十里越の防備のため、会津藩から野尻代官に任命されたのが丹羽族でした。

丹羽族は避難者の食糧調達や受入れの任務にあたり、自らも食糧調達に東奔西走します。しかし、寒村での食糧調達には限界があり、難民を賄うほどの食糧はなかなか集まりませんでした。そして、極度の食糧危機に陥り、餓死する者まで出るほどでした。

8月5日には、深手を負った長岡藩家老の河井継之助が只見に到着します。叶津口留番所で丹羽族から会津の戦況などを聞いたのち、目明し清吉の家に宿泊しました。

くしくも、河井継之助が只見に到着した8月5日の深夜、とうとう万策尽きた丹羽族は、食糧調達や食糧

危機の責任をとって自害してしまいます。その時の心情を丹羽族は、遺書で次のようにしたためています。

―自分は、兵糧総督として、その責任を果たせず、友藩は勿論、殿に対し誠に申し訳が立たない。この危機にあたり、自分が責任をとり自害すれば、友藩に対し、申し訳も立つ。また、後を託す部下達の食糧対策に村人の理解も得易いだろう。自害は決して責任逃れでも気が狂った訳でもない。この危機を脱するために、自分の果たし得る、唯一の責任の取り方である。後の事は頼む。―

悲報を知った只見の人々は、丹羽族の忠義に心を打たれ、各家の蔵をも開け、わずかな食糧や蓄えを差し出し、長岡の人々を救うことができたのです。

―只見と戊辰戦争③― 戊辰戦争が結ぶ絆―

8月12日、河井継之助は傷の治療のため若松に向けて出発しますが、傷の状態



▲目黒竹市家（只見字田中）が現在も守る長岡藩士石垣龍三郎の墓



▲只見代官所跡で丹羽族自刃の家（鈴木峯生宅／只見字上町）。現存する丹羽族が自害した部屋で鈴木家が大切に保存しています



▲河井継之助が逗留した目明し清吉の屋敷跡（五十嵐昭一宅／只見字塚前）



▲只見字原の旧名主宅の分家には、長岡藩主が使用した3組の布団が大切に保存されています



▲長岡藩・姫君が5日間宿所した場所（新国孝男宅／只見字原）

が悪化したため塩沢の医者、
矢沢宗篤宅に投宿し、8月
16日に亡くなりました（享
年42歳）。村人はその死を悼
み、残骨を拾い集めて塩沢
の医王寺に墓を建てました。
会津戦争は9月22日に
鶴ヶ城の落城によって終結
します。しかし、只見地方
ではその後も戦争が続きま
した。

9月23日、西軍（新政府軍）
の加賀藩士・森川余所之助
は、入小屋の戦い（現南会
津町東）で負傷し、21歳の
若さで切腹し果てました。

森川余所之助は小林の新福
寺境内に埋葬され、官修墳
墓として祭られました。9
月24日の滝原の戦い（現只
見町坂田）では東軍、西軍
双方に死者ができました。西
軍の加賀藩士・太田治右衛
門が戦死し、布沢の龍泉寺
に墓地があります（享年27
歳）。只見字沼田原では、只
見・叶津の戦いがあり、東
軍が西軍の築いた只見・叶
津間の陣地を襲撃し、西軍
を八十里越や大塩方面に追

いやりました。この戦いが
あったのは9月25日のこと
で、会津戦争最後の戦いの
場所となりました。

只見字沖の墓地には、長
岡藩士の石垣龍三郎の墓が
ありますが、現在でも只見
の人が墓を大切に守ってい
ます。さらに、只見には長
岡藩士の子どもを預かり育
て、長岡藩士の家系を引く
家もあります。

只見字寺にある長福寺は、
東軍・西軍の宿舎として使
用されたもので、当時のま
まの姿をとどめています。

戊辰戦争で活躍した元白
虎隊士の篠沢寅之助は明治
6（1873）年、只見小
学校教員として半年間赴任
しましたが、その折、家族
で逗留した家があります。

只見の人々は、長岡戦争
での避難者を助け、河井継
之助の墓を守りながら現在
でも墓前祭を行っています。
そして、只見と長岡は多く
の悲劇を生んだ戊辰戦争と
いう深い縁で結ばれている
といえます。



▲今年2月の只見ふるさとの雪まつりで河井継之助に扮し歴史講座を行う目黒信さん



▲河井継之助記念館に飾られている河井継之助の等身大パネル



▲昨年9月に記念事業「継之助ウォーク」を開催。叶津番所の三瓶こずえさんから説明を受ける新潟県長岡市の皆さん



▲戊辰戦争当時の解説や史跡めぐりを紹介したガイドブック



▲史跡に設置された標柱で説明文やQRコードが記されている



▲当時最新鋭のガトリング砲を使っていた河井継之助

― 実行委員会の設立①
史跡標柱の設置 ―

平成29年2月3日、町では町内の歴史研究者や観光団体などと「奥会津只見戊辰一五〇周年記念事業実行委員会」を設立しました。

これは、戊辰150周年の節目を機に、河井継之助を中心とした只見の歴史を「語り継いでいく」ために設立されたもので、昨年度からポスター、のぼりなどによる啓発活動や戊辰史跡巡りツアーなどの記念事業を実施しています。

昨年度は、町内の戊辰関連史跡を紹介するガイドマップ「只見町戊辰戦争史跡めぐり」を作成しました。このガイドマップは、河井継之助の逗留地跡や丹羽族が自害した代官所跡、長岡藩士の墓など只見町に残る戊辰戦争ゆかりの場所が詳しく紹介されています。これに併せて、ゆかりの史跡16カ所に標柱を設置し、ガイドマップを見ながら史跡巡りができるようにしました。

— interview —



鈴木 岑生さん
(只見)

只見代官所跡 丹羽族の自刃の家 —



私は茨城県の出身で、20代の頃に田子倉鉾山の仕事で只見町へやってきました。その後、この家に婿として入り、丹羽族の自刃の家だと知りました。自害した場所は、この家の座敷だと聞いています(右上写真)。

数年前には、河井継之助を紹介した新潟県のテレビ番組の収録で、この家に林修さんがやってきました。これまで注目されていなかった丹羽族について紹介され、大変驚きました。

私も河井継之助が通ってきた八十里越に関心があったため、八十里越通り抜けバスツアーに参加してきました。本当にすごい山の中に道路がつくられており、河井継之助も八十里越を越える際は大変苦勞なさったのだろうと感じました。

実行委員会が制作したガイドブックには、この家のことも紹介されています。多くの方々に知っていただくきっかけになればと思っています。

長岡藩士・石垣龍三郎の墓 現在も墓守をする目黒竹市家 —

当時、私の家は「山田屋」という旅館だったため、新潟の人も良く泊まりに来ていました。

この墓は、私の祖父の時代から守っており、父からこの墓には長岡の人が眠っているのだと聞きました。墓は大雪の度に倒れてしまい大変なこともあります。祖父の時代から守ってきたこの墓を今も守っています。

なぜ、ここに長岡藩士・石垣龍三郎が埋葬されたのかは分かりませんが、墓石は質もよく、今

も刻まれた文字がしっかりと見ることが出来ます。この墓を見る限り、石垣龍三郎は立派な人物だったのだと思います。時々、新潟の方から墓を見せてほしいと言われることもあります。

今回、ガイドブックで紹介されたことで、多くの方々に見てもらいたいと思っています。そして、これから先も、祖父の時代から守ってきたこの墓を守り続けていきたいと考えています。

— interview —



目黒 竹市さん
フミ子さん
(只見)

た。各標柱には史跡の説明文とQRコードが記されており、携帯電話やスマートフォンなどで読み取ることにより、簡単な情報をその場で知ることができます。

このガイドマップは、町内に全戸配布したほか、只見・川口・南会津の各県立高校や新潟県長岡市の河井継之助記念館などに配りました。ガイドマップの作成にあたり飯塚恒夫会長は「歴史を語り継いでいくためにも、しるしを残しておくべきと考えた」と話しています。

— 実行委員会の設立② —

平成30年度の活動

実行委員会では、戊辰150年の節目の年を迎える今年度、様々な記念事業を展開していきます。

河井継之助記念館では、戊辰一五〇周年特別展示を行っています。戊辰戦争時に只見で兵糧調達に奔走した会津藩代官・丹羽族のコーナーを設け、年表パネルなどで当時の只見の関わりを

— interview —



五十嵐 昭一さん
チエコさん
(只見)

目明し清吉の屋敷跡 河井継之助の逗留地



河井継之助が逗留したのは、現在の家の裏側に建っていた屋敷です（右上写真）。この写真は家を壊す際、私の息子が撮ってくれたものです。この辺には家がほとんどなかったため、継之助御一行は目明しを頼りに来られたのだと思います。

継之助が来られた時期は8月だったため、養蚕が忙しくとても大変だったと聞いています。継之助が滞在した1週間、御一行は家の上座敷に泊まり、自分たちは1段下の

部屋で生活していました。継之助がいる上座敷には付き人や医者が行ったり来たりするだけで、自分たちは入ることもできなかったそうです。何もしてあげることができず、家を明け渡したような気持ちだったのですが、とにかく大変だったという話です。

家の墓には目明し清吉の名が刻まれており、私が10代目となります。当時、この辺りには目明し清吉が関係する家が2軒あり、親分と子分といった間柄のようでした。

只見の歴史を 語り継ぐために —



只見は地理的に越後と会津を結ぶ通過点であったため、中心地とは違った役割や苦勞がありました。これらの歴史を語り継いでいくためには、今回の戊辰戦争150年は良い機会であったと考えています。只見の人も戊辰戦争に参加をしています。それが山内^{やまのうちのだいがく}大学隊です。この隊は、金山・只見の農民で編成され、八十里越の防備が主な任務でした。しかし、手薄になった越後の国境線の防備のため、遠征した小出島の戦いでは犠牲者をだし、八十里越を越えて逃げてきました。会津の敗色が濃くなる8月末に

は、只見から会津兵が若松に引き揚げ、その後を追って西軍2,000人が只見に進軍してきました。只見の人が大変だったのは、東軍だけの受け入れではなく、その後進軍してきた西軍も受け入れていることです。心情的には辛いと思いますが、「村を守る」という強い決意から西軍を受け入れたのでしょうか。また、山内隊も戦国時代から八十里越・六十里越は自分たちが守るという強い意志がありました。これを見ると、只見の人は武士の心を持ち、困った人は助けるという気質と秩序を持っているのだと感じています。

— interview —



奥会津只見戊辰150周年
記念事業実行委員会
(会津只見史談会)
会長 飯塚 恒夫さん
(坂田)

解説しています。また、会津若松市の会津新選組記念館から借りた史料や長岡藩の藩旗の残片、長岡藩主の家紋が入った幕、長岡藩主の陣羽織なども展示されています。来館者の記念撮影用に継之助の等身大パネル（約156cm）も設置されており、実物と比較することができま。特別展示は11月中旬まで内容を替えながら催す予定です。

今後の記念イベントとしては、9月1日に奥会津戊辰一五〇周年記念特別講演会、同月24日には只見町と長岡市との交流を目的として戊辰史跡を巡る「継之助ウォーク」、10月13日には「長岡市八丁沖ウォーク参加ツアー」などを予定しています。

— 戊辰150周年を機に
未来に伝えたいこと —
「八十里こしぬけ武士の越す峠」。

この句は長岡城の再落城後、八十里越を越える途中で河井継之助が詠んだもの

八十里

こしぬけ武士の

越す峠

監修：奥会津只見戊辰 150 周年記念事業実行委員会

です。戸板に乗せられて会津に敗走する際、「腰抜け」と「越後を抜ける」という2つの意味をかけ、継之助の悲しみが込められた一句です。

それから150年、新潟県と福島県を結ぶ八十里越は今、国道289号八十里越という新たな路として完成を目指しています。歴史的にも八十里越を介し交流のあつた新潟県、現代においても新たな路によって交流が深まろうとしています。

実行委員会の新国勇副会長は「塩沢では今も河井継之助の命日の8月16日に墓前祭を行っています。これは、地元の人々の熱意がないとできないことです。150年を機に、町内に残る戊辰史跡を再発見して郷土の歴史に思いを馳せていただければ」と話しています。このように実行委員会では、知られざる只見の歴史を積極的に発信し、後世に伝えていく取り組みを行っています。